

心の輪を広げる体験作文 小学生部門 優秀賞

「ぼくのバスケット仲間」

相模原市立小山小学校

五年

齊藤 さいとう

凧沙 なぎさ

ぼくはバスケットスクールに通っています。町田のスクールなので、知っている人はいませんでした。けど今は、仲間です。スクールには、ぼく以外に四人いて、三年生が一人、五年生が三人います。ちがう小学校から来ています。五人の仲間のうち一人は軽度の自閉症の男の子です。ぼくは、教えてもらうまで、気付きませんでした。その子と一緒にバスケットをしたり、休けい中に話したり、他の友達と同じ様に楽しく仲良くします。

ぼくから見たその子は少し人見知りで仲良くなれるまで時間が必要です。でも仲良くなれます。たまに機嫌が悪くなったり、急にバスケットをやらなくなったりします。けど、自分勝手な感じはしません。静かだけど暗くはありません。シュートフォームは少し変わっているけどよく入ります。

ぼくは、障害というと、大変・不自由・普通じゃない・こわいなどをイメージしていました。学校に行ってから、そのイメージがなくなりました。学校に行くまでは知らなかったし、知ろうとも思いませんでした。学校に行ってから思ったより、イメージがちがうことがわかりました。スクールのその子は、バスケット仲間です。急に気分が悪くなったり、いなくなったりするのは「特ちょうだからごめんね」とあやまられたとき、あやまることじゃないと思いました。

ぼくも、練習ができなくて、めいわくをかけてしまします。ぼくも「ごめんね」といわないといけないことをしています。みんな悪いところはあります。自閉症も障害です。だからその子は障害があるということですよ。それを知っても何も変わりません。知ったから特別やってあげるわけではないし、何をしたらいいのかぼくにはわかりません。ただ友達ということは変わりません。

ぼくは、その子に障害があると知る前に、友達になっています。知ったから友達じゃなくなるわけじゃありません。ただその子と自然に友達になれたからです。

障害というまちがったイメージを持ったぼくの方がまちがいでした。変なイメージはいりません。ぼくがその子と友達・仲間になれた様に、ただ相手と自分が仲良くなれるのかどうか、それが一番大切なのだと思います。